# ２０２５年度（令和７年度）学校評価自己評価表

| 新市中央中学校区 | 校番６８ | 福山市立新市小学校 |
|---|---|---|
| 最終更新日 | 2025 年（令和７年）４月１日 | |

## Ⅰ　福山市

ミッション　福山に愛着と誇りを持ち，変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビ ジ ョ ン　各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し，日々の授業を中心として評価・改善を進めながら，子どもたちの確かな学びを実現している。

## Ⅱ　中学校区

### 前年度学校関係者評価の主な内容

・「オール新市」を掲げる中で、地域の良さの発信やボランティアの取組など、もっと地域を好きになる取組を進めてほしい。
・HP などでの出前授業の取組（キャリア教育の取組）は興味深く、今後も継続して児童生徒にたくさん学んでいただきたい。
・学校に登校できない子供たちにも目を向け、そこへの取組をもっと発信した方がよい。（知らない人が多い）

### 児童生徒の現状

・全国学力・学習状況調査等をはじめとした学力調査を踏まえ、基礎的・基本的な内容の定着に重点を置く必要がある。
・キャリア教育の実践を通じ、校区で育てたい資質・能力を意識しながら様々な活動に取り組むことができており、４月当初から 12 月末で、肯定的評価をする児
童生徒が増えている。

| 育成する力 資質・能力 | チャレンジ＆チェンジする力、自己理解力、自己表現力 |
|---|---|
| めざす子ども像（義務教育修了時の姿） | ・自分の目標達成に向けた計画を立て、取り組む児童生徒。そして、その取組を定期的に振り返り、改善策を考える児童生徒。<br>・自分の将来の夢や目標を持つ児童生徒。<br>・自分の思いや考えを相手に分かりやすく説明する児童生徒。 |
| 中学校区として統一した取組等 | ・地元事業者や地域の方と育成したい資質・能力を共有しながら、出前授業、探究学習、職場体験学習、面接など、様々に取り組んでいく。 |

## Ⅲ　自　校

### ミッション

明日の新市を拓く「生きる力」の育成

### 学校教育目標

新市の町で、自ら学び、やさしく、たくましく生きる子どもたちの育成

### 現　状

＜児童＞
○ 国語科、算数科を中心に、各教科等で学ぶ児童の姿は変わりつつある。
・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む」児童
50.0%(４月)▶89.7%(２月)
・「自分の思いや考えを、相手や場に応じて分かりやすく説明している」児童
72.6%(10 月)▶84.3%
○ 全国学力・学習状況調査の正答率が、国語科・算数科ともに全国平均に達していない。
正答率 40%未満の児童も、20%を超えており、問題を読み解く力、思考の過程を表現する力、問題を解くために求められている知識・技能の定着が不十分である。
・全国学力・学習状況調査　正答率 40%未満の児童　20.7%
・単元末テスト　正答率 40%未満の児童　国語 2.0%　算数 7.0%
＜授業＞
○ 授業づくり、カリキュラムの充実等に対し、教職員の意識は着実に向上している。
学力調査結果を踏まえ、改善ポイントを意識した授業づくり、地域資源を活用した実感を伴う授業づくりを進め、学力の向上につなげていく必要がある。
・「子どもの学びや発達への理解をもとにカリキュラムを見直し、実践している」教職員
91.7%(10 月)▶92.3%(２月)
・「地域の人や課題などに児童が触れる機会を持っている」教職員
66.6%▶75.0%(２月)
・「教科の面白さを実感している」教職員
100%(10 月)▶100%(２月)

| 育成する力 資質・能力 | | チャレンジ＆チェンジする力 | 自己理解力 | 自己表現力 |
|---|---|---|---|---|
| めざす子ども像 | 低学年 | 自分のやりたいことに挑戦している。 | 自分のよさに気づく。 | 自分の思いを相手に伝えることができる。 |
| | 中学年 | 困難なことにも挑戦し、最後前やりきることができる。 | 自分の得意なことや夢中になれることを見つける。 | 自分の思いや考えをまとめて表現することができる。 |
| | 高学年 | 活動を振り返り、改善策を考えることができる。 | 自分の将来の夢や目標を持つ。 | 自分の思いや考えを多様な表現方法を用いて説明することができる。 |

| 研究 | | |
|---|---|---|
| | テーマ | 実感を伴い、考える過程を大切にした学びづくり<br>～思いや考えを表現することを通して～ |
| | 内容等 | ・正解を求めるだけでなく、正解にたどり着く過程を大切にした授業づくり<br>・自分の思いや考えを「話す、聞く、書く、描く」ことにこだわった授業づくり<br>・そもそも「何を学ぶか」「何につまずいているか」に立ち返った教材研究 |
| めざす授業の姿 | | ・確かな教材研究を土台に、「何を学ぶか」「何につまずいているか」「どう学ぶか」を明確にし、各学年の学習内容を確実に身に付けている。<br>・文章を読み解き、言葉、数、記号の意味、根拠を問うている。<br>・「繰り返し身に付けること」と「考えることを通して身に付けること」を一体的に捉え、授業や授業につながる帯タイム・家庭学習に意欲的に取り組んでいる。<br>・新市の課題を解決することを通し、各教科等で身に付けた力を発揮している。 |

# Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立新市小学校

| 年目 | 中期経営目標 | 重点 | 分類 | 短期経営目標 | 目標達成に向けた取組 | 評価指標 | 中間評価（10月1日） | | | | 最終評価（2月末） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | □指標に係る取組状況 | ﾌﾟﾛｾｽ評価 | 達成評価 | 改善方策 | □指標に係る取組状況<br>◎短期(中期経営目標の達成状況 | ﾌﾟﾛｾｽ評価 | 達成評価 | 総合評価 | 改善方策 |
| 2 | 子どもが学びに向かう力、学び続ける力、なりたい自分に向かう力を育成する。 | ★ | 見直し | 目標達成のための方法を考え、粘り強く取り組む子どもを育成する。 | • 教科学力の定着と生活習慣の確立を一体的に捉え、授業づくりポートフォリオを起点とした授業改善、家庭学習等の充実を進める。<br>• つまずきの早期発見と確かな教材研究を通し、各学年の学習内容を身に付ける取組を評価・改善・更新する。<br>• 校区で毎週水曜日をメディアコントロールデイとし、ゲーム等の時間を自己管理する力を育成する。 | •「カリキュラムを見直し、実践している」教職員前年度以上(R6 92.3%)<br>•学力調査、単元末テスト等の正答率４０%未満児童前年度以下(R6 学テ 20.7%)<br>•「１日のゲーム3時間以上」児童前年度以下<br>(R6 学テ 43.3%)<br>•「課題解決に向け、自ら考え、取り組む」児童前年度以上<br>(R6 89.7%) | | | | | | | | |
| | | ★ | 見直し | 自分や地域のよさや課題を知り、思いや考えを相手や場に応じて分かりやすく説明できる子どもを育成する。 | • 地域の課題を解決する過程で、場や相手に応じた表現活動に取り組む。<br>• 地域資源を活かした授業等を通して、多様な人や考えに触れる場面を設定する。 | •「自分の思いや考えを、相手や場に応じて分かりやすく説明している」児童前年度以上(R6 84.3%)<br>•「地域の人や課題などに児童が直接触れる機会を持っている」教職員 85%以上<br>(R6 75.0%) | | | | | | | | |
| | | | 継続 | 子ども一人一人が力を発揮できる多様な学びの場を充実する。 | • 個別に配慮を要する児童の指導計画を作成し、保護者・関係機関との共有及び改善に取り組む。<br>• 学校図書館運営協議会を月１回以上開催し、児童の利用状況に応じた運営改善に取り組む。 | • 不登校児童の出現率減少<br>(R6 2.6%)<br>•「学校に行くのは楽しい」児童前年度以上<br>(R6学テ 90.0%)<br>• 個別の指導計画の作成及び家庭との共有100%<br>(R6 100%)<br>•「学校図書館を利用している児童」前年度以上<br>(R6 44.9%) | | | | | | | | |
| 5 | 教職員が元気・笑顔で勤務できる環境を充実する。 | | 継続 | 教職員が実践力を高めるとともに、やりがいや充実感を持って教育活動を行う。 | •各教員が「研究テーマ」を設定し、授業公開を行うことで「教科の面白さ」を味わう。<br>• 教材研究デー、No会議デーを毎月設定する。<br>•教職員発の取組を実現化し、所属感や自己肯定感の向上に努める。 | •「教科の面白さを実感している」教職員100%<br>(R6 100%)<br>•「授業づくりの時間が確保されている」教職員前年度以上<br>(R6 58.3%)<br>•「個性が認められている」教職員前年度以上<br>(R6 83.3%) | | | | | | | | |

［プロセス評価の評価基準］

| 評点 | 評価基準 |
|---|---|
| 5 | 取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。 |
| 4 | 取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。 |
| 3 | 取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。 |
| 2 | 取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。 |
| 1 | 取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。 |

［達成評価の評価基準］

| 評点 | 評価基準 |
|---|---|
| 5 | 目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。 |
| 4 | 目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。 |
| 3 | 目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。 |
| 2 | 目標を下回り、成果よりも課題が多かった。 |
| 1 | 目標を大きく下回り、成果が認められなかった。 |

［総合評価の評価基準］

| 評点 | 評価基準 | |
|---|---|---|
| 5 | １００%以上の達成度 | 十分に目標を達成できた。 |
| 4 | ８０%以上１００%未満の達成度 | 概ね目標を達成できた。 |
| 3 | ６０%以上８０%未満の達成度 | ある程度目標を達成できた。 |
| 2 | ４０%以上６０%未満の達成度 | あまり目標を達成できなかった。 |
| 1 | ４０%未満の達成度 | 目標を達成できなかった。 |